

特集△平成六年度大会シンポジウム▽「転換期における国家と天皇」

天皇制研究の現在

——テーマの設定に寄せて——

本 郷 隆 盛

わが国の歴史社会が容易にのりこえることのできないものが二つある。一つは国家の問題であり、他の一つは天皇の問題である。そして実はこの国家と天皇とは一見すれば全く別の問題であるかみえながらその実、両者は深く結びついていることに注意する必要がある。

国家と天皇に関する言説を仮に「天皇制研究」と呼ぶとすれば、日本思想史の研究において天皇制の研究が、さけて通ることのできない問題であるだけでなく、いまなお実践的な研究テーマとしてわれわれ歴史研究者の前にあることは否定できない事実である。

それは、思想史研究の意義と目的が、それぞれの歴史社会の問題状況と、それを解決してきた筋道、あるいは、未解決の問題を明らかにする作業を通して、人間が、個人的ないしは社会的な次元において囚われて在る現実を対象化しつつ、その囚われからの解放をめざすことにあり、かつわが国において「国家と天皇」の問題こそは、人々の意識と行動を大きく拘束してきただけでなく、いまなお意識的・無意識的に規定しつつあることは周知の事実だからである。

天皇制に関する諸研究が、わが国の歴史研究において少なからざる比重を占め、政治史や法制史のみならず、人文・社会科学の諸分野が、それぞれ方法を異にしつつ、総合的な研究のテーマとしてきたのはそのためである。

それではすでに膨大な研究蓄積のある天皇制に関する研究をいまふたたび日本思想史学会のテーマとして設定する場合の独自の意味はどこにあるのであろうか。

ここでは過去の天皇制研究を三つの時期に区分しつつ、現在の時点での固有の特徴について考えてみよう。

天皇制に関する研究の第一期は、いうまでもなく戦前、すなわち明治以降、今から五〇年前の敗戦にいたるまでの時期である。この間の主要な研究動向は、日本の近代国家が、天皇制国家として自らを現出したことと関わって、多くは研究とは名ばかりの、天皇制に関する過去の言説をそれぞれの文脈から切り離して羅列し、つなぎ合わせることによって、わが国においては、天皇制が国家の伝統的な特質であり、歴史的な必然性と正統性を有するものとの学説を仮

構することであった。換言すれば、既存の国家を礼讃し、それに連なる思想や人物を顕彰することにその主要なエネルギーが消費されたのである。その意味でそれはいわば、学問が政治の端女となった顕著な事例である。

日本思想史の研究が、「日本思想」の研究となり、その実、天皇制の礼讃となった悲しき事例である。とりわけ昭和のファシズム期の諸研究にその一つの典型をみることが出来る。

そしてこのような日本思想史のイデオロギー化と政治への従属の裏面に、久米邦武や津田左右吉の日本古代史の研究など、国家と天皇制に関する科学的な歴史研究への弾圧と、壬申の乱や南北朝の両立など、歴史的事実の隠蔽と抹殺があったことは周知のことに属する。実証的な天皇制研究はいわばタブーの領域に属していた。だが、天皇制に関する研究上の不幸は、それで終わったわけではなかった。

天皇制研究の第二の時期、すなわち天皇制ファシズムから解放された戦後は、戦前の講座派理論の成果に立脚しつつ、近代天皇制の科学的研究を深化させたが、その主要な関心は、一つは天皇制の封建的・前近代的な性格を暴露し否定すること、二つは、敬して遠ざけるという態度であり、その形成の歴史的条件や存在の合理的根拠を捉える点では少なからざる弱点を有していた。

それは端的にいえば、歴史社会における共同体の解体とそこにおける個人の析出を歴史進歩の指標とした結果、人間の歴史社会や国家における共同性や共同意識の必然的な意味を十分に認識することができなかつたことによる。

このようにして、天皇制に関する研究は、戦前における無条件的

礼讃と戦後における全否定という、ベクトルを異にしつつも、強いイデオロギー性に覆われて、その存在の持つある種の合理性や、永続性の秘密を明らかにすることができなかつたという点で、大きな制約のもとにあつたといえる。

その意味で、天皇制に関する諸研究が、先験的な価値の拘束から自由になるとともに、新しく実践的な意味を担って研究課題として登場してくるのは、一九七〇年代を待たなければならなかつた。

それは、戦後思想においては、六〇年安保や六八年の世界的な学園紛争を経て、それまでの「共同体の解体から個人の析出へ」という価値基準から、もう一度自立した個人の視点から共同性を仮構するという思想状況の流れと、歴史研究においては、民衆史や国家史の視点から、日本の国家の在り方を捉え直そうとの新しい研究動向の萌ばえを前提としなければならなかつた。

それをたとえれば、近世史研究に例をとれば戦後長い間、政治史や法制史・制度史の観点からは、天皇が全く無力化し、形式的な存在となつたとする考えが長い間通説であつた江戸時代の天皇について「国家の重要な一部分として、天皇・朝廷は機能しつづけた」とする観点が強く出されるようになった。

戦後長い間、武家権力から抑圧され、国家権力から疎外されていたとされた朝廷・天皇がいまや近世の武家権力がその支配の正統性を確保する上で欠くべからざる存在として見直されるにいたつたのである。⁽²⁾

そしてその後、八〇年代後半には水林彪・高埜利彦・藤田寛氏などによって政治史・法制史・宗教制度史などの観点から天皇制研

究はそれぞれ深められつつあることは否定できない事実である。³⁾

だが、このような新しい研究動向に対して、思想史研究がそれらの諸研究との間に有機的な関係を有し、かつ思想史独自の観点から充分な貢献をしてきたかというといささか疑問なしとしないのが現在の研究状況ではあるまいか。

その理由としては、先述したように、戦前の日本思想史がその実「日本思想」の研究となり、日本思想＝天皇制思想となって政治に自ら従属することに甘んじたという苦い歴史があり、その意味で思想・イデオロギーに対する嫌悪の感情が戦後蔓延したこと、あるいはまたそれに加えて、戦後日本の歴史学の主流が政治史や社会経済史にあり、思想史は全くの余計者の存在と見做されたこと、さらにまたわが国において体系性を持った思想・文化はいずれも外から輸入されるものとの長い歴史の中で自ずと培われた無意識的な心性によって、歴史研究において思想史が果たす独自の役割や有効性について充分な戦略をもつことができなかったこと、などに由ろう。

だがこのことは、一面では日本の歴史社会における思想的な生産性の弱さによると同時に、実は、戦後の日本社会における思想の貧しさでもあったことに気付かざるを得ない。

すなわち思想史とは、われわれの過去及び現在の世界観や世界像に関わっており、本来、現在及び未来において世界をどう構想するかというすぐれた主体的な課題と密接に関わるものだとすれば、戦後における思想史研究の未熟さは、われわれ自身の思想主体としての弱さにも関わることとなろう。

戦後日本の思想的課題は、天皇制イデオロギーに象徴される戦前

の共同体的諸拘束から解放された民主主義的で自立的な個人の社会的創出にあったが、その個人が担うべき思想の中心については考うべくもなかったのである。

民主主義や個人主義は、いわば制度や方法の問題であり、それを通していかなる価値を創造するかは、全く閑却されたままであった。戦前の国家に対する忠誠が、戦後は企業や家庭に代位されたにすぎず、精神の有り様はなら変わることはなかったのではないか。

思想史とは、人間の社会や世界への関わり方などすぐれて人間の思想や観念に関わる領域に対する研究であり、その意味では、政治史や制度史などがある具体的な事件や事実の発見によっていわば存在論的に事実を積み上げていくものとは異なり、いわば存在論的な事実を前提にして、人間がそれをどのように観念し、どのように世界観や世界像を組み立てていたかという、すぐれて価値的な世界に関わる学問である点にその特徴がある。

そのことは、一方では、思想史に対して、思想史は何とでもいえる、だから信用できないという悪罵が投げられる所以でもあるが、他方では、その点にこそ、思想家の、価値の形成主体としての自己投企が可能となる所以でもあるだろう。

その意味で、かつての近代的価値なるものが、近代社会の発達のいわば極限化した段階において、ある揺らぎを見せ、さりとてそれに替わりうる価値を容易に見出すことができない現代の思想状況において、どのような共同性を仮構できるのが思想家に問われていることになる。

人間の個なるものが、それ自体フィクションであり、人間社会は

なんらかの共同性と共同意識を不可欠とするれば、戦前の国家と天皇に代わって、戦後人々の忠誠対象となった企業や家庭がいまやその共同性を解体しつつある現在、ふたたび、国家と天皇がその装いを新たにしつつ人々の共同幻想として再生産されない保障も無いであろう。

その意味で、日本の歴史社会が長い間、共同幻想の中核とした「国家と天皇」をめぐる研究の意味は、低下するどころか、ますます増大しつつあるともいえる。

その点は次の事実からも明らかとなろう。

すなわち、これまでの歴史社会において、天皇の権力や権威は制度的ないしイデオロギー的に実体的に存在し、その意味で視えるものであったのに対し、現在の象徴天皇制は、制度的・イデオロギー的には何ら実体的なものではなく、その意味では「視えないもの」として存在している。

だが、それにも拘らず、六年前に昭和天皇の病氣や死去の際のあの日本中を駆けめぐった自粛／＼の大騒ぎは、庶民の生活基盤を震撼させ、自殺者をも出すに至ったこと、換言すれば、日常的には何ら「視えない」意識下の意識が「ある日突然に」日本中を席捲するという事態に対して、誰もそれを怪しまないという精神状況の中に、日本の歴史社会が内包している母意識の存在を看とることができ¹る。

すなわち、歴史研究の意義は、たんに制度の変遷や政治史的な事件の年表を作ることで終わるわけではなく、人間と社会の深層に在って、人々の意識と行動を規定している諸要因を白日のもとにさら

け出し、それを対象化することによって自己解放と新しい価値の形成に向けて自己脱皮することを背後から支えるものだとするれば、それこそ思想史研究の固有の課題たりうるはずである。

周知のように歴史の過去自体は、無限の事実の集積であり、自らその意味を開示するわけではない。歴史の意味は、歴史を解き明かそうとする人間のすぐれて主体的な営みによってこそ、その意味を開示するものだとするれば、いま問い直さなければならないのは、日本の歴史社会におけるわれわれ自身の生の構造とその意味をいって他にないはずである。その意味で、歴史を問うとは、自らの生の意味を問うことである。

近年、「言説」という言葉が一つの流行となっている。それは歴史や社会における価値形成それ自体が一つの閉じた体系であることを暴露した点で、かつてのマルクス主義の階級史観にたったイデオロギー暴露やK・マンハイムのイデオロギー論とは異なる意味で、人間主体の思想的営みが、否応なく存在被拘束性を持つことを明らかにしたものとみることができ、だからといって、人間はあらゆる価値から自由になることができるはずはなく、所詮、人間の生の営みは、自己や社会の正統的価値の歴史的被拘束性を対象化しつつ、新たな価値形成に向けて自己投企をつづけるより他はないのである。だとすれば、問題は、自らの価値形成Ⅱ言説をつねに開かれ²たものとして、たえざる批判にさらしつづけるより他にはないことになる。

今回、われわれが、汗牛充棟ただならぬ膨大な天皇制研究の蓄積があるなかで、あえて「国家と天皇」をテーマに掲げたのは、一つ

は、このわれわれの住む日本社会が、それに囚われて在りながら、その実、容易に対象化することができないこの難問を、われわれ自身との共通の研究課題としていきたいという想いと、二つは、それを自らの研究課題として取り組んでおられる第一線の研究者の研究成果に耳を傾け、それに触発されながら、われわれ自身の研究の深化をはかりたいと考えたからである。

今回のシンポジウムでは、それぞれ対象とする時代と研究方法を異にしつつも、現在、それぞれの研究領域でみるべき成果を挙げておられる四人の方に報告をお願いし、それぞれの歴史段階で登場する天皇像が、それぞれのいかなる歴史あるいは国家段階において、どのような歴史的・社会的諸条件のもとで造型ないし形象化されたのかを歴史具体的に明らかにすることを前もってお願したが、そのことはそれによって、一方では、天皇制の永続性の秘密を明らかにすることができるはずであると考えたからに他ならない。

所詮、歴史研究とは、すでに起こってしまった過去の歴史の意味を解明する、その意味では後追いの学問に過ぎないが、そこで明らかにされた歴史の意味は、現在及び未来をも照らし出すはずであり、そこにこそ歴史研究のすぐれて戦略的な営みがあるともいえる。

報告者の刺激的で挑発的な発表とそれへの忌憚のない批判を願って、テーマ設定の説明としたい。

注

- (1) 宮地正人『天皇制の政治史的研究』校倉書房 一九八一年
- (2) 深谷克己『近世の国家・社会と天皇』校倉書房 一九九一年
- (3) それらの成果の一端は『日本の近世2 天皇と将軍』中央公論社 一九九一年、『日本の社会史3 権威と支配』岩波書店 一九八七年、『講座・前近代の天皇 第2巻 天皇権力の構造と展開2』青木書店 一九九三年などにみることができる。
- (4) 安丸良夫『近代天皇像の形成』岩波書店 一九九二年

(宮城教育大学教授)